

景観とは、その地域に生きる人たちの心映えであり、アイデンティティーそのものだともいえる。地域の資源、本来持っていた力を丁寧に掘り起こし、そこに光を当てていく作業でもある。山形の奥深い風土の中で「地域に根ざした建築」を一貫して追い求め、早くから生態学の視点を取り入れ設計活動を展開してきた建築家の本間利雄氏（本間利雄設計事務所主宰）に景観に寄せる思いと、そこで果たすべき建築家の役割を聞いた。



建築家（本間利雄設計事務所主宰）
本間利雄氏

「建築は風景の「つ」の視点必要

環境の質向上へISOに精神的価値も

——景観への関心が高まっていますが
その国や地域の自然と、人間が関わってつくられる社会とがあいまって、その社会の、その時代の文化が景観となって表われるのだと思っています。そうした景観をきちんと支えていく意識が大切です。わが国は文化といながらも、まだまだ「縦」思考の社会ですから、それをトータルにつないでいくことも重要なことです。

なにより、国民にわかりやすく語りかけることが大切ではないでしょうか。たとえば建築専門誌にしても一般の人はまず見ません。専門家はわかっている、一般の国民の視座は違う。東京農大の進士先生とお話したときに、全国各地の「不思議な風景」をピックアップして一冊の本にし、それを国民に見せるのはどうかとおっしゃっていました。周りの景色や風景から突出した、どう見てもそぐわないような建築などを「不思議なもの」として国民に広く見せようと。そういうところから入っていくのもいいのではないかと思います。いままで、あまりにも無批判にそういう不思議なものを受け入れすぎたのではないかと。おかしなものにはきちんと疑問を呈することも必要なことだと思います。

——建築家の果たすべき役割は
建築家も建築に対して「作品」という意識がちょっと強すぎたのではないかと。もちろん景観の質を上げていくような建築もありますが、周囲の景観から浮き出ているものも多い。雑誌などで通常そうは見えない角度で写真を撮り、格好良くコンセプトを語るのもいかがなものかだと思います。

やはり風景の中の建築なのです。全体の街並みや都市景観の中に風景の一つとして納まる方が日本の風土にはあっているのではないのでしょうか。まして日本にはこれだけ豊かな自然景観がある。それを損ねず、壊さないで人工物、建造物が静かに納まるのが日本の景観ではないか。建築が一人格好つけるものではない。どうも資格云々といっているうちに何か大切なものが置き忘れられてしまうのではないかという思いもします。

——これから求められる視点について

建築は規模の大小ではありませんし、建築、土木含めて本当の豊かさとは何かという時に、まだ経済を追いつめるのは情けないような気がします。経済も大切ですが、建築家もあまりにクライアントの意向に終始して、単なる御用達になっていないか。クライアントは専門家ではありませんし、その御用達ではいい景観はつくれません。行政にしても入札で叩き合わせさせるのではなく、どんなものがつくれる人なのかをきちんと調べておくべきです。

また、いくらコンセプトが良くても景観を壊しては何にもならない。いかに時間に耐えられる建築をつくるか。いまはそういう時代に入ってきたと思っています。そういう建築をめざしていけば必ずと景観の質は上がっていくのではないのでしょうか。ISOなどもモノとしての品質だけではなく、景観のような精神的価値も捉えられるようになることが望ましいと思っています。

（日刊建設通信新聞2004年11月26日）